

来迎寺と高木氏・丹南藩陣屋（らいごうじとたかぎし・たんなんはんじんや）

丹南の来迎寺はもともと、奈良時代に行基^{ぎょうき}が建て、毘沙門院^{びしゃもんいん}と号した。のち、平安時代末期の天承元年（1131）に融通念仏宗^{ゆうつうねんぶつしゅう}の開祖である良忍^{りょうにん}が、阿弥陀如来を安置する堂を建て、融通念仏十ヶ郷辻本大勧進毘沙門阿弥陀寺と称したという。

融通念仏は一時的に衰退したが、鎌倉時代末期に大念仏寺^{だいはんぶつじ}（大阪市平野区）7世となった法明^{ほうみょう}は、宗勢の復興に努めた。法明は、良忍の聖跡と伝える阿弥陀寺が荒れていたのも、菅生神社^{すがう}（河内国丹南郡、現堺市美原区菅生）より感得した阿弥陀如来像を勧請して、同寺を中興した。正中元年（1324）には、寺号を阿弥陀寺から河内十箇郷六本別寺諸仏山護念院来迎寺と改めた。

来迎寺は、江戸時代に入って、法明由緒寺院として融通念仏宗の中本山となり、河内国丹北・丹南^{やかみ}・八上郡、摂津国東成・西成^{くんだり}・百済・住吉郡にある39か寺を末寺とした。法明の大衣が今に伝えられると共に、境内墓地には法明の供養塔が見られる。

本堂裏の庭園には、樹齢600年といわれるイブキの木があり、大阪府天然記念物となっている。

一方、江戸幕府に開いた徳川家康^{とくがわいえやす}は、元和9年（1623）、三河^{みかわ}（愛知県）以来の直参^{じきさん}であった高木正次^{まさつぐ}に丹南の地を与え、高木氏は1万石の大名として丹南藩主となった。丹南藩は、来迎寺の東側に陣屋を置き、明治初年^{はいはんちげん}の廃藩置県まで続いた。

丹南藩は、江戸時代を通じてほぼ河内国丹南郡・丹北郡・志紀郡の20数か村を領地とした。高木氏は来迎寺を菩提寺としたことから、本堂には藩主代々の位牌が並び、初代正次や11代正明の五輪塔も来迎寺墓地に祀られている。